越後の墓標－14世紀以前を中心にして－

水澤　幸一（胎内市教育委員会）

１．木製塔婆について

越後における木製塔婆は、1300年前後の紀年銘木簡と伴出した50㎝以下の笹塔婆が数遺跡から出土しているにすぎない。主な出土遺跡をあげると、新潟市馬場屋敷遺跡下層（白根市教委1983）、同浦廻遺跡（新潟県教委2003）、胎内市下町・坊城遺跡Ｃ地点（中条町教委2001）出土のものがある。

これらで注目されるのは、下町・坊城遺跡例と浦廻遺跡の数例に頭部を墨で黒く塗り、圭頭で２段の羽刻みを入れるタイプが認められることである。これらは、平安末期の『餓鬼草子』に描かれた木製板碑の系譜を引くものであるが、その間をつなぐものは非常に少ない。

２．石製塔婆について

北陸における最古の紀年銘石造物は13世紀後半である（水澤2001）が、定量的出現は、13世紀第４四半期からと考えられる（ただし越後頸城の関山系石仏を除く）。これは、上の笹塔婆の出現と時期を同じくしており、両者が不可分の関係にあることを意味しよう。越後では、頸城郡で五輪塔が、阿賀北～阿賀南と魚沼で板碑が主に造立される。佐渡では、中世の石造物は非常に少ない。

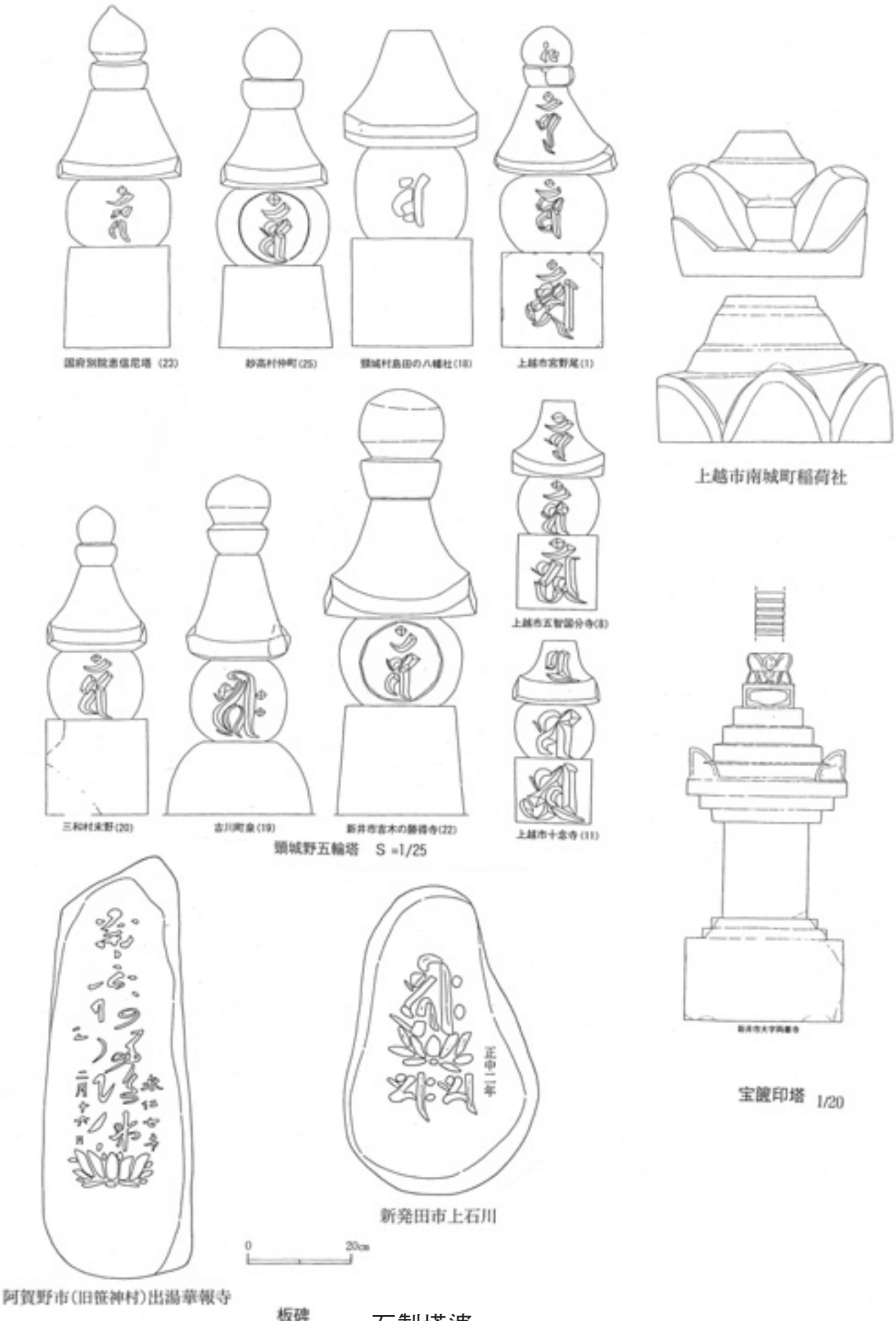
石塔は、特に古いものの内に中空の納骨信仰が認められるものがあり、その後14世紀後半になると骨壺が埋められた上に石塔が建てられるようになる。ただし、１基のみの場合は骨壺の直上に立てられる場合があるが、多数の場合は、必ずしも直上ではない場合が多いことから、骨壺の納入と石塔の造立にはタイムラグがあるものと考えられる。

３．木製塔婆と石製塔婆の関係

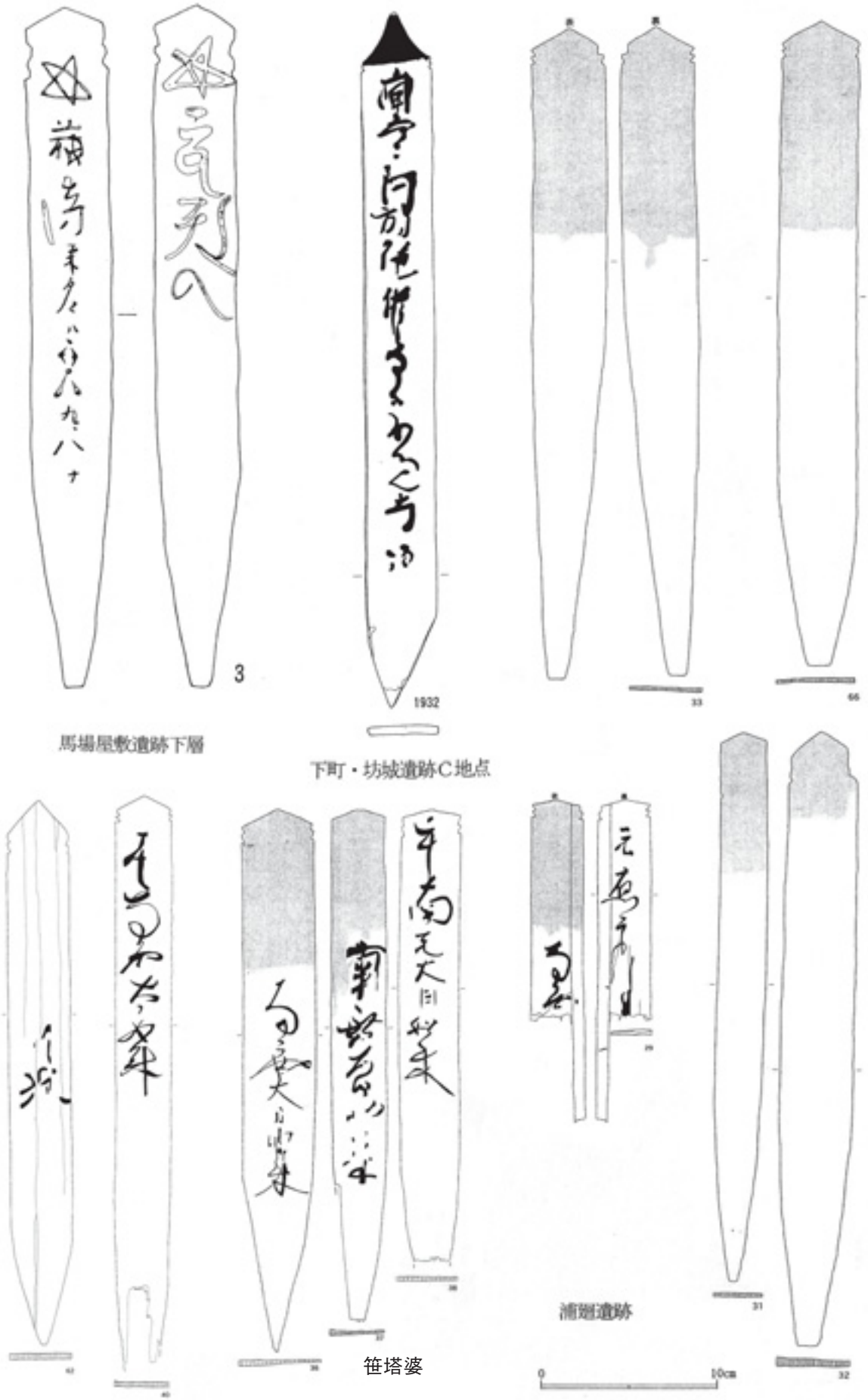
上でみてきたように、13世紀以降基本的には不朽の材である石製の塔婆が墓標としての位置を確立していく。木製品は、石塔が出来上がるまでの早い段階での供養や葬儀の場での一時的な役割を果たすようになる。それが笹塔婆の盛行につながり、現代にまで続いている。今回の研究集会は、能登の野々江本江寺遺跡での木製塔婆の出土を契機にしているが、今回の集成及び遺存条件の悪さを考えても12世紀以前の段階で塔婆を立てられた階層は、ごく一部にとどまるであろう。その裾野が広がるにつれて、多種の墓標が選択されることになり、それらは野外で長持ちする石塔が占めることになる。12世紀の段階で木製塔婆が選択された理由としては、やはり加工技術によるものと思われ、石塔造立集団が各地に定着するまでには、東大寺再建にかかわった宋人石工の将来から一世紀の時がかかったということとなろう。

参考文献

石川県埋文　2011『野々江本江寺遺跡』
白根市教育委員会　1983『馬場屋敷遺跡等発掘調査報告書』
中条町教委　2001『下町・坊城遺跡Ｖ　Ｃ地点』町埋文調査報告書第21集
新潟県教委　2003『浦廻遺跡』県埋文調査報告書第126集
北陸中世考古学研究会　2000『中世北陸の石塔・石仏』第13回研究会資料
北陸中世土器研究会　1994『中世北陸の寺院と墓地』第７回研究会資料
水澤幸一　2011『仏教考古学と地域史研究－中世人の信仰生活』高志書院
山川　均　2008『中世石造物の研究－石工・民衆・聖』日本史史料研究会選書２


国府別院恵信尼塔（23）
妙高村仲町(25)
頸城村島田の八幡社(18)
上越市宮野尾(1)
上越市南城町稲荷社
上越市五智国分寺(8)
三和村末野(20)
吉川町泉(19)
新井市吉木の勝得寺(22)
上越市十念寺(11)
頸城野五輪塔　S =1/25
新井市大字両巻寺
宝篋印塔　1/20
新発田市上石川
阿賀野市(旧笹神村)出湯華報寺
0
20cm
板碑

石製塔婆



笹塔婆

木製塔婆